

あこのころのCSIを振り返る

理 事 椿 康 和

(広島大学大学院社会科学系研究科マネジメント専攻)

CSIはもうすぐ設立10周年を迎えます。これを機会に、設立当初の数年間を振り返ってみました。

【設立当時の情報通信環境】

1993年当時は、インターネットはもとより携帯電話もWindowsも、一般に利用される存在ではありませんでした。ワープロもTeXを使っていた人が多かったと記憶しています。参加組織との接続は、64Kbps以上の「高速」デジタル回線に加えて、SLIP (Serial Line IP) やUUCP (Unix to Unix Copy) も使われていました。インターネットへの接続はWIDE (64Kbps) でスタートし、WIDEとの回線の高速化 (512Kbps) やSINET (6Mbps) との相互接続の開始によって、バックボーンが大幅に増強されたのは94年後半以降です。

【イベントの展開】

最初の数年間、CSIではフォーラムやシンポジウムの積極的な開催を通して、地域におけるインターネットの普及・啓発に力を入れていました。広島が中心でしたが、地元関係者の協力により、当時まだ珍しかったWWWのデモを目玉にして、松山 (94年)、高知 (95年)、松江 (96年) でも実施しました。93～95年度でのこれらの催しへの参加者数は延べ1,500名近くになりました。そして、全国からインターネットの運用管理に携わる技術者を迎えて、96年12月にIPMeeting'96を広島で開催することができました。これらのイベントは主に冬場に行われ、「雪」が絡むことが多くなりました。IPMeetingの時も12月にしては珍しく雪が積もり、参加者の方々はその後もCSI=雪という印象を残されたようです。

【事務局問題】

組織運営に関する悩みとして当初からついて回ったのが事務局でした。組織が増え、CSIの活動が活発になるにつれて業務量がどんどん増え、事務局の強化が必要になっていきました。場所についても、設立当初のSES (松山) を振り出しに、広島工業大学、広島市立大学、広島修道大学と転々とせざるを得ず、NPO法人化を機会に、ようやく現在の場所に落ち着くことになりました。

人類が史上初めて経験する地球規模の情報ネットワークの展開は、この時期、世界中で進められていました。その活動の一端に参加して、皆さんと経験を共有できたことは、私にとって非常な幸せです。

CSI役員・運営委員

理事長	吉田 典可
副理事長	相原 玲二、染岡 慎一
理事	片山 博昭、小関 祐二、佐々木 正人、椿 康和、西村 浩二、前田 香織、前田 真理
監事	石永 正隆、大場 充
運営委員	相原 玲二 (委員長)、前田 香織 (副委員長)、今井 一雅、上野 優香、河野 英太郎、佐々木 正人 田島 浩一、玉井 基宏、西村 浩二、原田 隆、前田 真理

(2002年11月1日現在)



Internet に求められているもの

東京大学情報基盤センター 助教授 加藤 朗



私がはじめて、小雨降る広島空港（いまの広島西空港）に降り立ったのは、WIDE を広島に伸ばせるかどうかという相談をするためだった。つまり、まだ本格的なインターネット環境（とは言っても X.25 を利用した、ISDN よりも遅かったはず）は、広大な敷地に留まっていたわけであるが、それから十年以上が経った現在、インターネットは爆発的に普及し、一般家庭ですら、当時は想像もできなかった帯域でネットワークにアクセスすることができるようになりつつある。

我々の仕事が、単に接続性を提供することだけだったとすると、もう引退してもいい筈である。しかし、接続性が rich になり、電子メールや Web 以外にインターネットの新しい使い方が提案され、それが夢物語ではなくなってくるにつれ、解決しなければならない問題も多岐にわたって指摘されるようになる。



例えば、ネットワーク帯域が十分にあれば、高品質な画像伝送が可能になる。Digital Video をネットワーク経由で送る DVTS はその一例であり、そういうものが使えるようになってくると、それを実際に使って遠隔授業や講演をしてみたいくなる。ところが、実際にやってみると、ネットワークに必要なのは帯域だけではないことが分かってくる。

授業が中断されないように、機器やネットワークそのものの安定性も重要になる。ネットワークに優しい方法でパケットを送出するという改良がアプリケーション開発者には求められるし、そういうことをしなくても大丈夫なネットワークを構築運用することも必要である。つまり、ネットワーク屋とアプリケーション屋、場合によってはトランスポート屋やセキュリティ屋の綿密かつ円滑なやり取りが必要不可欠である。詳細な解析をするためには、測定屋との連携も必要になる。DV を届けることが不可能になった場合に備えて、MPEG-1 や H.323によるバックアップも必要であるし、最悪国際電話も考えなければならない。そうすると、教室側の設備やスタッフのサポートなどの問題も考慮しなければならない。

アプリケーションの端点間が大学の構内に閉じているならばまだ良いが、県境や国境を越える場合も多く、特に言語や時差の問題は深刻である。問題解決のためには、どちらかが深夜早朝になってしまう場合もあり、双方の関係者に非常に強い動機づけがされていなければ、共同作業は捗らない。双方に徹夜覚悟の根性がある場合は稀で、外国の研究者が日本語を喋ってくれる可能性は皆無ではないにしろ非常に少ない。その結果、誰かが飛び回り、別な誰かが徹夜する結果になる。

よく、「ネットワーク屋の癖にあって話をしないといけないの?」と指摘される。ホワイトボードを前に、フリーハンドで絵を描きながら議論する、というのに匹敵する環境は残念ながらまだない。ネットワークに対する課題も沢山あるし、入出力機器にも改善の余地は大きい。実験室レベルでは、Mimio のような装置を使うことはできるが、誰にでも使えるほどこなれてはいないし、いざというときの準備も大変で、気軽にネットワーク越しに議論する環境はまだできていない。

バーでビールを飲みながら相談するのに匹敵する紐帯感をネットワーク越しでも得られるためには、我々がしなければならない課題は沢山あって、当然隠居できそうもない。

（かとうあきら、成田空港にて）



平成14年度「電波の日・情報通信月間」表彰について

CSI事務局長 染 岡 慎 一（安田女子大学）



6月3日、総務省中国総合通信局・中国電波協会共催の平成14年度「電波の日・情報通信月間」記念式典が広島全日空ホテルで挙行されましたが、CSIが貢献団体として表彰されました。

この表彰は総務省中国総合通信局が情報通信の発展に貢献した個人及び団体に対して行うものです。CSIは、任意団体として創立された1993年以来、地域においてインターネットの普及・啓発に関する活動を展開してまいりました。これらの積極的な活動が評価され今回の表彰となりました。式典では、重田憲之中国総合通信局長より、当協議

会を代表して出席した吉田典可理事長に感謝状が授与されました。

CSIではこれを励みとし、今後とも地域の情報通信の発展にさらなる貢献をすべく活動をしてまいります。これからも皆さまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。また、本年度より、事務局長を安田女子大学の染岡が勤めさせていただいております。皆様よろしくお願いいたします。

会員紹介シリーズ No.5

県立広島女子大学

(<http://www.hirojo-u.ac.jp/W3HW000j.html>)

広島県立大学

(<http://www.hiroshima-pu.ac.jp/>)

広島県立保健福祉大学

(<http://www.hpc.ac.jp/index.html>)

広島県には、県立広島女子大学（広島市）、県立大学（庄原市）、保健福祉大学（三原市）の三つの県立大学があり、それぞれ特徴を

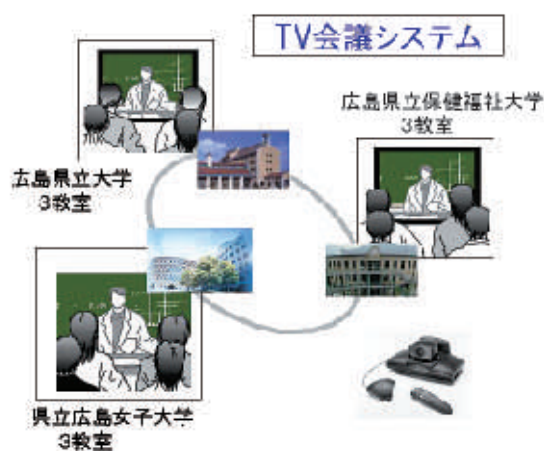
持った大学です。それぞれの大学には情報教育センターがあり、教員や学生の支援を行っております。女子大では生活環境学科が、県立大では経営情報学科が、保健福祉大では放射線学科が情報教育の中心です。

女子大学の場合、95年に改組と同時に学内インテリジェント化を進めるために全研究室にLANを引き、端末を貸与しました（当初反対もあった）。当時は珍しかったのですが、講習会を開き最低限の技術を身につけてもらいました。恐らく、大学関係で、事務連絡など全てメールで行ったのは我々が初めてではないかと自負しています。

さて、昨年度より学生がより興味のある授業を選択できるようにと、TV会議システムを使った遠隔授業をはじめました。昨年は1教室でしたが、今年からは各大学3教室を遠隔授業用に充て50数科目を開講しています。色々と試行錯誤しながら画質の改良を行っています。会議や講演会あるいは学会などにも利用しています（<http://www.hirojo-u.ac.jp/~isinaga/longDsit-Learn/LDLTVS.htm>）。

今、三県立大学は統合に向けて走り出しています。そうなると益々ネットワークの利用は増えてくると思われますので、強固でセキュリティの高い、しかも利用しやすいネットワーク環境の構築が求められると思います。会員の皆様方のご支援を御願います。

（文責：県立広島女子大学 石永正隆）



「Mamedegansu」プロジェクト 研究成果発表会報告

理事・副運営委員長 前田 香織
(広島市立大学 情報処理センター)



2002年6月22日、当協議会が主催した「広島地域の学校における高度マルチメディア通信に関する研究プロジェクト」(通称「Mamedegansu」プロジェクト)の研究成果発表会を広島市まちづくり市民交流プラザ(広島市中区)にて開催し、約90名の方にご参加頂きました。広島市教育委員会教育長 松浦洋二氏にご来賓のお言葉を頂き、プロジェクトの研究成果概要に続いて8件の実践実験の発表、最後に今後の展開について述べました。実践発表は先進的な実践実験(遠隔授業、遠隔合唱等)だけでなく、障害児学級交流という新しい分野での試みや日常的なマルチメディア通信の利用方法についても紹介しました。研究成果は<http://www.csi.ad.jp/activity/MAMEdeGansu/>で公表しています。プロジェクトの開始の予想を越える研究成果をまとめることができ、本プロジェクトの遂行にご支援頂いたすべてのみなさまに感謝します。本プロジェクトの成果を生かし、今年度も引き続き「Mamedegansu 2」を遂行しています。また、研究成果を発表する機会をもちたいと思っています。



CSI会員紹介 (2002年11月1日現在)

団体正会員 (24組織)*50音順 ☆印は接続会員 <http://www.csi.ad.jp/sec/members.html#dantai>

学校法人 広島国際学院、学校法人 高知工科大学、☆学校法人 福山大学、☆株式会社 ネットスプリング、☆株式会社 広島市産業情報サービス、株式会社 ラディックス、☆呉大学、☆県立広島女子大学、☆高知大学、☆高知工業高等専門学校、☆高知女子大学、☆財団法人 放射線影響研究所、☆日本赤十字広島看護大学、ネットワン・システムズ株式会社、比治山大学、☆広島大学、☆広島県立大学、☆広島県立保健福祉大学、☆広島市、☆広島市立大学、広島商船高等専門学校(マルチメディア時代における教育研究会)、☆福山平成大学、安田女子大学、☆弓削商船高等専門学校

賛助会員 (13組織)*50音順 <http://www.csi.ad.jp/sec/members.html#houjo>

伊藤忠テクノサイエンス株式会社、株式会社 エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国、株式会社 日立製作所中国支社、株式会社 ミウラ、ジャストシステム株式会社、社団法人 広島県情報産業協会、総務省中国総合通信局、中国通信ネットワーク株式会社、中国電力株式会社、西日本電信電話株式会社 広島支店、日商エレクトロニクス株式会社 広島支店、日本電子計算株式会社、日立中国ソフトウェア株式会社

個人正会員 (40名) <http://www.csi.ad.jp/sec/members.html#kojin>

編集後記

From:CSI 6号では「振り返る」をテーマに記事を寄稿していただきました。言い古された言葉ではありますが、「Dog Year」と言われるほど、移り変わりの激しいこの分野で、組織が継続していくことの重みを感じます。引き続き、CSI各部会では会員皆様のご参加をお待ちしております。(EK)

2002年11月21日 企画広報部会・広報誌編集担当 今井 一雅、河野 英太郎、上野 優香

